

〇はじめに：本技術資料のねらい

河川堤防や道路法面、公園の広場等の造成など、植栽が求められる構造物や施設に対して、これまで外来種の牧草など外来植物が多く利用されてきた。植栽で定着した外来植物の一部の草種は、近隣の構造物や施設に逸出し、繁茂するものもあり、周辺の在来種を駆逐するなど地域の生態系に悪影響を及ぼすことが課題となっている。

そのため、道路・河川・公園等の各事業に伴う植栽工事では、外来生物法等を背景に環境や景観に配慮する区間や施設において、地域生態系に配慮した地域性の在来野草を利用した工法の利用が求められている。

しかしながら、在来野草は、ススキやチガヤ、ヨモギなど一部の草種を除いて、緑化工事に利用するための種子の流通や植栽方法が確立されていない。

また、流通している在来野草についても、コスト削減や人手不足が続く中、生産量、コストの面から外国産種子の使用が大半を占める状況にあり、日本に生育する系統との遺伝子のかく乱等問題が懸念される。

そのため、一部の事業においては、国内に生育する在来野草を用いた施設への植栽にあたり、コストや人手不足の解決の一環として、計画・事業実施・維持管理の各段階に適した形式、規模で地域やボランティアの人々との協働による在来野草の種子採取や生産などを実施し施設への導入を進めている。

このような背景のもと、国土技術政策総合研究所では、今後、地域性の在来野草を活用した緑化を推進していく観点から、望ましい在来野草の種を選定する考え方を整理するとともに、事業者が自ら又は地域と連携して簡便に採取・生産する方法について研究を行ってきた。

本技術資料は、それらの研究で実施してきた文献整理や室内及び屋外での栽培試験の結果、全国の優良事例のヒアリング調査結果をもとに、在来野草の種子採取、保管、生産の具体的な作業手順と実際に利用する際の注意点を含めて候補となる植物リスト等を取りまとめ、各事業に合わせた在来野草の効率的、効果的な草種選定やその導入の検討、実施の一助となるよう作成したものである。

ただし、試験により検証した草種は、候補とした200種のうち41種であり、かつ温室や恒温装置を利用した結果であることから、異なる条件下では必ずしも同様の結果を得られるとは限らない。

そのため、事業や工事での使用に当たっては、本技術資料等を参考にしつつ、それぞれの現場の状況に応じ、在来野草の個々の特徴に合わせてより適応性の高い草種を選定できるよう、適宜、事業に関わる学識経験者や専門家、建設コンサルタントとも確認しながら、よりよい導入計画をまとめるなどして、積極的に地域性由来の在来野草を利用した緑化に取り組んでいただきたい。

平成30年2月

国土交通省 国土技術政策総合研究所
社会資本マネジメント研究センター
緑化生態研究室 室長 舟久保 敏